

# 絵画論——特に社会学的見地から

小林 一 雄

## Some Thoughts on Painting Art—Especially from Sociological View

Kazuo Kobayashi

### (一) 序 説

#### (1) 前書

本論は社会学的立場から見て (一)序説, (二)本論, (三)結論という順序に従って書き進められる。今回はその序説のうちの(1)前書を述べ、今後の全体的行文の見透しを素描する。

絵画論の展開は一般に美学又は美術史専科の中にとり込まれ、それ以外ではせいぜい文化論や文化の発展段階説の中で、いわば脚註として付記される程度で済まされた。

最近出版された絵画論として注目をあびた二著がある。その一つは「絵画の領分」(芳賀徹著, 朝日新聞社刊), もう一つは「時はいつ美となるか」(大橋良介著, 中央公論社刊)。これとても前者は比較文化史論であり、後者は一哲学徒の考察なのであった。

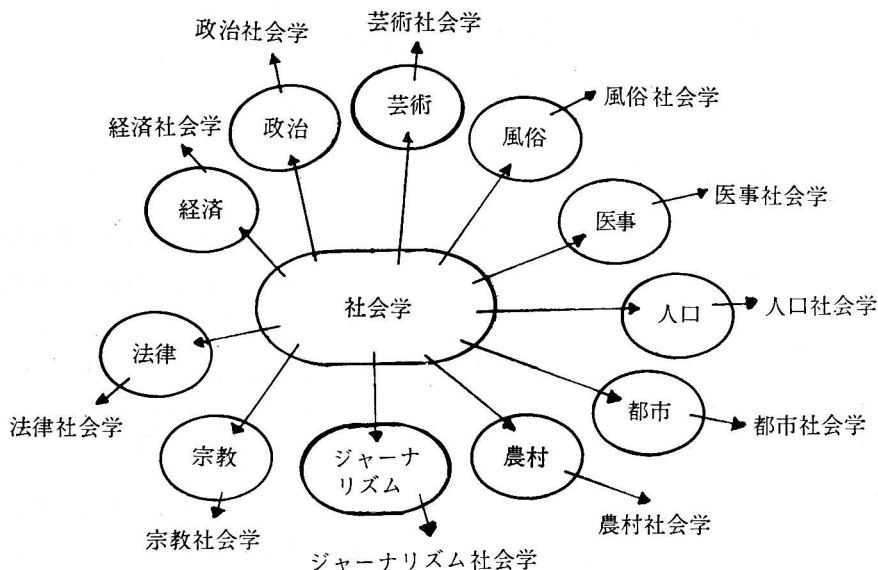
従ってもし絵画論が社会学の学問体系内において問題視されるとすれば、やはり脚註的な記事として取り扱われるか、せいぜい著者の片寄ったというよりも偏愛的な嗜好の産物として登場してくるものようである。

さて社会学の学説史をふり返れば、この学問誕生の歴史的新しさの故に、個有の研究分野の設定の必要上、周辺領域に浸透する (einbrechen) こと度々であった。(そのような多面的な学問の性格は祖といわれるオーギュスト・コントに既に胚胎していた。) そして研究領域は次第に拡散を重ねつつ今日に及んでいる。自然現象を除いた領域については、そのすべてが社会学的色彩を帯び、社会学理論で説明し畢るかまたは説明し得る可能性を持つものとして把握されがちであった。

社会的=社会学的と連関付ける操作は、「社会的」要素の中に「社会学的」要素の

断片が駆け込んでいると考える態度から来ている。

たとえばアメリカ大統領の選挙戦の報道は日本でも連日伝えられていたが、選挙の社会学。サラ金の問題がクローズアップされるとサラ金社会学。大学生の就職期を迎えると就職の社会学。高学歴について批判が高まれば学歴社会学。老人の相対的増加が注目を惹けば老人社会学。スポーツについて何等かの問題が提起されればスポーツ社会学といった具合に。以上のことは通俗的な「社会学」の用語例なのであるが、そうではなく厳密な学問的内容を持つものとして、浸透の態様はつぎのように図示することができるであろう。



このように社会学はあらゆる社会的（人文的）事象にドッキングして光彩陸離たる広汎な内容を持つに至っている。（反面自らの個有の学問領域を絞り切れず理論的緊密さに欠けるという自己反省は社会学の学説史にいつも浮き彫りにされている）。Wissenschaftslehre についての多様性と不統一性は、いつ清算されるのか、当然21世紀に持ち込まれていかざるをえない。

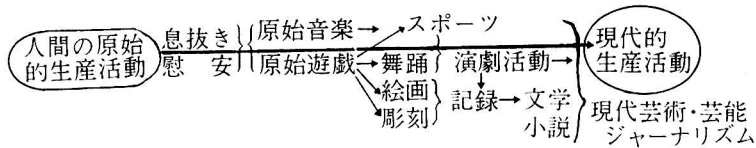
いってしまえば社会学への評価のプラスとマイナスの分れが、社会学誕生の初期より提示されていたのである。

コント以後の社会学学説史の展開は、そもそも社会学体系誕生の当初から背負ってきた宿命の投影としてあらゆる国の社会学徒の頭脳をよぎった。社会学の理論篇とその応用篇との持つ多様性と饒舌性とは依然として今日まで清算されることがなく、か

えって各方向各路線に拡散し、理論と実践と歴史の三位一体的構成は他のどの社会科学の領域にも見られない特殊性を引きずってきている。

この特殊性は特に社会学主義(Soziologismus)として標榜され、隣接科学に方法論を提供するか、または活性化の素材を提示することで、予期せざる寄与を成しとげているとして評価もされた。

今これら学説史に踏み込むことは当初の課題ではないので、それはそれとして置く。筆者はここで一つの仮説を設ける。それを図示するとつぎの如きものである。



原始的生産活動(自家生産と自家消費)から封建性社会を経過して現代的生産活動に至る移行は太い線として記録されなければならぬ。生産(流通を含めて)なき社会は当然に逼息して消滅せざるをえないからである。社会存続の絶対条件は生産過程(生産—流通—消費)一従ってまたその再生産過程抜きには考えられない。

生産手段の所有形態や拡大再生産への意欲の維持が何であり何に依存するか、搾取の地域的変遷(国内的または国際的)の歴史が奈辺において立証されるか、資本蓄積の根本原理の追求が国内的または国際的競争でどのように自己貫徹をするのか、戦争(または国際紛争)の構造が結果的に経済活動の時々爆発であるのか、生産調整としての恐慌回避策たる戦争がさらに深刻な恐慌を生み出すものなのか、社会総資本の質量的変化が、永久に本来の面目を保てるものか、資本と労働との二極分裂が、統一的水平線に発展的に解消してしまえるのか、総じていえば体制維持のため小出しに処理される社会矛盾が、小出しでは済まされぬ処理限界を越えた時、それは21世紀のどの辺までであるのか。処理限界はもっと先の世紀まで持ち越されるのかどうか。

以上のような問題処理を追いながら社会は自転をやめることがない。海底プレートの移行による歪みが地震発生メカニズムだといわれる。国家経済を震撼させる社会的プレートの移行変化は全地球的規模で人類の運命を根こそぎストライクするであろうか。

さて人間の社会生活遂行の物質的な基礎は生産から消費へという基本線上を外れることがあってはならない。これは今述べた通りである。個人の生命の再生産の問題にしても国家の存続維持の問題にしても物質的生産継続は不可避である。

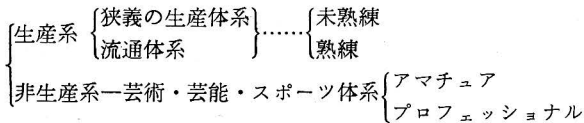
しかし経済行為の合い間に始めた息抜や慰安や鼓舞や自己表現や自己満足や自己主

張は、よしどのように幼稚でたわいなく見えても、どの日かどの時間かに実施されたであろう。自己記録や集団記録のそれらが彫刻や絵画の領分に遺跡として残され、時に発掘されて博物館資料となっている。

原始芸術 (Urkunst) は生産内外において形態化され、継続されていったであろう。基本的経済行為の繰り返しの過程で、これら原始芸術も時々繰り返されると、おそらく一つのパターン化した営為として集団的に定着していったと見ていいであろう。ここでは芸術の他にスポーツも入れて、これらを非生産的\* な行動と呼ぶことにする。

\*非生産的という用語例の説明

経済体制内における生産的活動のすべてを「生産的」、商業活動(流通活動)のすべてを「非生産的」と規定しておき、他に非生産的とは広く芸術、スポーツ等の生産系以外の活動をさすこととする。



非生産系の領域にアマチュアとプロフェッショナルの区別が生ずるのは生産系領域における熟練と未熟練の区別に対応する。

部族間の闘争が出陣式や戦勝式で、これはこれで平時とは別の非生産的なパターンを作り、農業や合唱やヴォーカルが生産活動とは別の一つの社会様式となり、平和時に引きつがれていくこともあったであろう。

生産規模の拡大か縮小かは平時と戦時とは勿論異なるが、(一般的にいえば民需の縮小と軍需の拡大は戦時傾向、その反対は平時傾向)。何れにしても片方では自然発生的に(後には意識的に)非生産的営みが継続された。

そうして非生産的営み(その様式化)は歴史的経過のうちに、生産的活動の領域内にとどまっているものと、生産的活動の領域外に少しずつはみ出していった、自らの専門化の過程に入り込むものが生じてくる。

原始音楽、原始宗教(祭祀)、原始舞蹈、原始絵画、原始彫刻等およそ現代的芸術の萌芽はすべて自家生産・自家消費という封鎖的な原始経済の中であって、少しずつ同一主体(個人及び小集団)の中にあれこれ発生していったことであろう。特殊な才能発見や才能訓練に大きく時間をさくことはすぐには行われなかったことであろう。

基本姿勢はあくまで生産活動にあって、その合い間に労働の苦悩を紛らわす、仲間内の親睦をはかる、または明日に備える生き方のためにといった程度であったはずである。みんながたのしみ、みんなが参加する、みんながいつでも演ずるという今日で



いう大衆芸能である。あくまでも生産活動の大枠内の出来事であったはずである。

この大衆芸能が、大枠内から超えて徐々に離脱し、専門化していく過程は、それなりに長い歴史を必要とした。大衆芸能の芸術化！過程である。

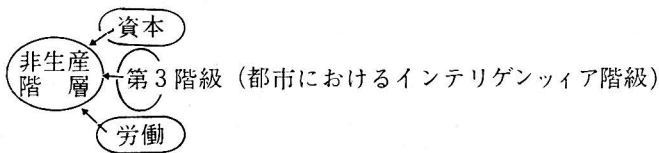
同一主体が本来の生産活動中に附随的に催した非生産活動＝大衆芸能の演目と中味（作品）が別の主体に成り変わり、生産活動から切り離されて独立の領域を形成する。一種の職業分化の結果が出来あがる。元来は同根ともいえる内容が、専門化した職業——生涯の職業として芸術活動の成立に一部は変化をとげるということである。しかし芸術活動が貧しく、身に一文も入らぬということはあるまいだろう。そうではなく、米やパンを作る（＝収入を得る）ことと同様に位置付けされなければ問題にならない。米やパンの一粒一片も作らないが、米やパンが得られてくる過程がなければならぬ。

その秘密は生産活動から獲得された果実が社会的容認の下に非生産活動の領域に割譲されていくことである。社会的生産物総量はかくして二つの領域に分割される。一つは生産過程内に、もう一つは非生産過程内に。

物を作っても喰えるし、物を作らなくても喰える。物を作らなくても喰える階層の一つはルンペン・プロレタリアートであるが、もう一つの階層が非生産階層なのである。

資本制社会にあっては能力（才能）の分化・専門化の進行が、自由主義の建前のもとに、芸術活動を崇高な天職に押しあげたが、実は生産活動だって天職なのである。

しかし生産活動にたずさわる労働者階級の中に熟練・未熟練の姿があるように非生産活動にたずさわる階層にも熟練・未熟練の区別がある。今これを図示するとつぎの如くである。



資本制社会の階級構成は資本と労働とその中間に位する第3階級であるが、この3つの階級にボーダーを敷いている非生産階層がいるわけである。

非生産活動における未熟練階層は生産活動に本来組み込まれていながら非生産活動に流れ込むことを讃美する意識にみちている人々である。（前掲図で矢印で示す）

存在は意識を決定するという命題に従えば非生産階層に境界を接してここに流入し

ようと試みる混在地帯はまがりなりにも芸術家意識を育むことになる。殊に現代資本制社会の余暇利用問題にしてみれば、非生産階層に臨時編入させることによって、社会的充足感を得させているという功德がある。社会矛盾の暴発を防ぐ安全弁にもなっているが、町の絵描、町の物書、町の作曲家、町の彫刻家、町の歌手、町の舞踏家等々の誕生である。

プロ野球に対して町の野球がある如くである。野球の場合には自他共にプロ・アマの峻別があり、プロ選手の失策には草野球かと野次がとぶ。野球愛好家は自分にはとうてい不可能な美技を見物したいために入場料を払いこんでやってくる。

実は自分が当の野球をやっているべきところを自分の分身としてのプロ選手に代行させているのである。専門的な解説者がいてゲームを分析してくれるが、見物客もそれなりに選手のつもりで時には野球評論家になったりして席をあたためる。ヨーロッパのプロサッカー試合のTV中継を見ていると、観衆の興奮度は大変なものである。あたかも自分が見事なパスを出したり、ゴールゲッターになった如くに手を舞わせ足を踏みならしている。これとてプロ選手に代行させて己の遊戯意識を非生産活動の一環として満足させているわけであろう。

非生産活動のうちでも比較的安楽に見える部門は絵画である。絵画人口という用語例はないが(比較的多用されている野球人口、ゴルフ人口の例を借りてみる)、絵を習い始め、絵具やイーゼルを持ち始めている人々のうち何人が画家としての非生産活動に入れるのだろうか。筆者は皆無だと思うが、そこが不思議なところで、絵画程に町の絵描がプロ作家意識に染まれる領域はない。自己満足が「美の表現形態」という甘美な膜にコーティングされて、これ程滑稽に達成されるところもない。

これが音楽活動だったらどうであろう。入場料を取ってホールで成果発表をするには、どうあっても本選手でなければならない。幼児期からその道に入り、時には長い外国留学を経て、きびしい研鑽の後にプロの音楽家と銘打たれる。ピアノ人口のうち一体どれ程の人数がホール・リサイタルを開けるのだろうか。絵画の領分とは較べ物にならない厳選である。

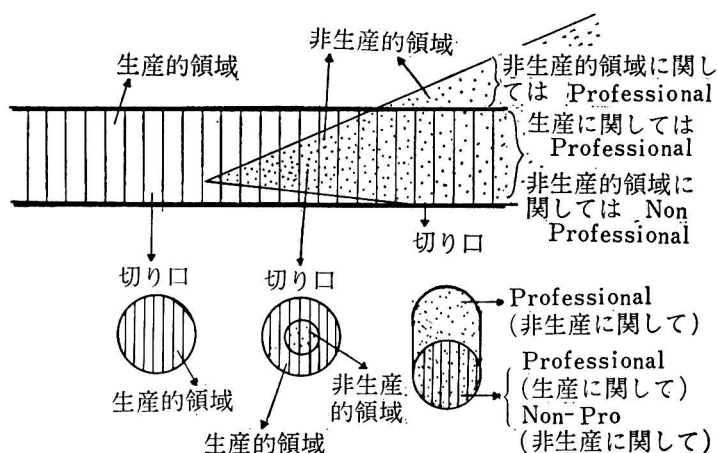
絵画の場合は100人の町の絵描がいれば100人の芸術家が、1000人の町の絵描がいれば1000人の芸術家が誕生してくるように思える。筆者が表現してみたいのは本職→本職に代行して貰う観衆(観賞者)の系譜から、本職→(代行観衆→擬似本職に成り上がり)→代行観衆の序列が生まれてくることである。

本職→代行観衆の社会関係は純粹蕪雜であると思うが、本職に代行して貰って鑑賞させていただく立場に立つはずの観衆が、いつの間にか本職に似せた意識で己が存

在を改鑄してしまう不思議さである。むしろかえってアマチュアのほうが絵画的表現に富んでいる等と世辞をいわれたりすると、この不思議さはますますわけがわからなくなる。絵画の領域程、素人芸を本職化して見せる領域はない。そのことを筆者は別に否定しない。音楽や彫刻と較べて、こと程左様に大衆化されて「随所に主となる」安易さがあり、愉楽があるからなのである。

労働に熟練と未熟練との区別があり、掃除労働や集金労働の単純労働が、熟練労働であると自己主張できるわけがない。非生産的領域においても素人芸と本職芸術とは峻別されてしかるべきところ混在し混乱をきたしている。かかるチンダル現象を文化の混乱というべきなのか、文化の成熟というべきなのか筆者は迷う。他人の愉しみを傷つけるな！ その通りだが、愉しみが芸術家モドキについ成り上がってしまうことを怖れるのである。

以上の見解を図示によって要約する。



つぎに具象作家から2名、抽象作家から1名の登場を願い、(1)前書の部分の結びとしたい。上手な絵、巧妙な絵は現在の日本にも腐る程ある中から、とりあえず選出した3名である。基準はそれぞれの作品論の中でふれておいたが、寡作であること、時流に阿ねらないこと（時流に毒されていないこと）、力量特に勝れていること（きびしい習練を己に課していること）の3つに絞った。画家といえども生活を背負っているので経済が成立する必要がある。しばらく前から画家はハングリーでなければといわれた。しかしこれは精神的な意味においてである。物質的にハングリーであり続けたら意気阻喪する。さりとて世評に気を奪われて、社交上手な渡世をやっていたのでは芸は荒れていくであろうし、人間的に卑屈になって、これは見られたものではない。孤

高、孤絶、高邁、精進、しかしてなお人間の魂をゆさぶる造形絵画でなければならぬ。饒舌な絵、鬼面人を驚かす絵を描いている作家、同じテーマの作品ばかり描いている作家。何よりも画家であるから色彩が美しくなければならぬ。色彩が美しいという表現はしかし誤解を招き易い。色彩が真実であることと云い直すべきであろうか。筆者は毎年春秋、主な公募展（都美術館会場）を見続けているし、あわせて印象的な作品群をカラー写真で摂っている。

公称美術評論家の如く、ともすれば人気取りに終始することもなく、ともすれば不純な動機に左右されることもなかったつもりである。自己流に陥入らないよう多少の勉強によってわが身を励ましたつもりである。しかし所詮は批評家はいかに批評家で終らざるをえない。文中でも述べた本職に遠いこと遙かなものであり、思わぬところで過誤を犯しているであろうし、間違っているところもあるにちがいない。この稿の本論は論叢の次号に連載の予定であるが、襟を正して筆を進めていく覚悟を持っている。

誰にいうのではなく、己にいいきかせて己の姿の猫背にならんことを希うのみである。

それにしても絵描、その亜流の絵描、またその亜流の絵描の何と多いことだろう。文化国家の中味の一つがこのような画壇構成によって満されているとすれば、その反作用は大体見当がつこうというもの。

テーゼはアンチ・テーゼに化するという。その時は一体どういうことになっているか。社会矛盾は案外無邪気に人々の肩をゆさぶり、大した悲壮感も味わせて貰えないかも知れない。しかし、社会矛盾が子守歌のように人々の体を流れていくことは決してあるまい。21世紀に地球上に人間がいるかどうか不明である。時に人々の歩行が極めて空しく見えるのは、あながちわが年令のせいばかりではあるまい。

#### 島田 稔 (1934～)

昭和59年9月の初め、東京原宿の小さい画廊で、殆んど人々に気付かれることもなく開かれ、そして閉じられた個展があった。島田のものである。陳列作品の中味の濃さの故に、不思議な時間が都会の一隅にも過ぎるものだという実感を持った。

北九州市の出身。画廊から貰った案内状に「海と船と人を画く」とあったのに惹かれて画廊を訪れた。今にして思えば奇縁奇遇であった。中央画壇から遙かに離れた場所にアトリエを造り、師と仰ぐ人も持たず、独学で今日の画風を築いてきているのに一驚した。勿論すぐれた素質があつてのことではあつたろう。全日本海員組合の土井一清組合長が推薦の辞として「島田稔氏が描くさまざまな世界には、したたかな海上

生活者の眼と、あふれるロマンを感じます」と述べていた。

たとえば画廊に顔を見せている会期中に、画廊の前を往来するおびたしい若者（いわゆる原宿族と代ゼミに通う受験生の流れ）をスケッチ帳に数冊描きためる描写力の確実さとしなやかに怖れを覚えた。往来を歩いている人を見て、それが一瞬のうちに残像となって脳裏に焼きつくという。カメラのシャッターとレンズとフィルムの機構が、島田の眼球と脳膜と手の間に秘密に保たれており、数秒間の残像定着の上で忽ち人物スケッチが出来上がる。その人物の年令、服装、体型までを即座に表現してみせる能力は並大抵のものではない。スケッチの手品師である。これ程の迫真力と速写力とを備え付けて、なお神韻漂々たる風格を画用紙に残している。またたきを忘れて見ほれた。（よく個展の際スケッチを額装してみせる絵描がいるが、島田に匹敵する者は数少ない。）余程普段の修練の積み重ねがあるのである。

無機的に巧妙なスケッチをする絵描は、大勢いるが島田の例は珍らしい。芸大等の専門教育機関に学んだというのではなく、身は一介の船舶機関部員として船底に働らきながら、10年間もアメリカ航路に従事し、ひたすら閑を盗んで絵筆\*を握り、対象に迫ろうとした姿勢には鬼気迫るものがあつたはずである。

\*狭い船内のこととて用具は極端に小さくする必要から絵筆は1本だけ、長さも切りつめ他の画材もすべて小型化軽量化に務めたという。

一人の人間が全身を傾倒すれば、何がやれるか、その生きた例証を見ると、怠惰に鞭うたれる思いがする。

無口で人見知りが激しく、不愛想な容貌の島田が、画面を通じてこの上なくヒューマンな心情で語りかけてくるカラクリは一体何であろう。写真を6枚掲載しておく。

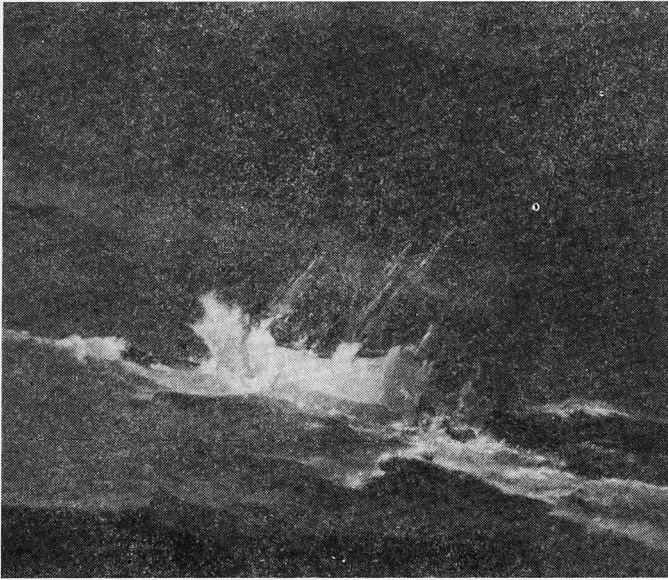
省みて他をいうことは島田の最も嫌悪するところであろうが、いわせて貰うと、己を宣伝し、画商を抱え込み（画商が抱え込み）、画壇的政治力を駆使して立身出世を計る俗臭紛々たる絵描が都会には多すぎる。（拙稿「私の日展批評」——東大「絵友」誌昭和58年発行所載——にもこの点にふれておいた。）

島田の如き朴訥と剛直と含羞とを持っていて、これ程に心に訴える画面を見せてくれる、稀有というべき資質であろう。

この文章を読んですわ金儲け金儲けと九州に駆け出すさもしい画商がいないことを祈るばかりである。ヴィンチ村のレオナルドは自分にとって神様であるが、オランダの夜警の作者の足元ぐらいいはそのうちになんとか手が届きそうな気もすると語る腫は、やはり遠くを見遣っている澄んだものであつた。

都会にいる絵描も美術批評家と称せられている人々も、おびたしい画商連も、己の

営みに謙虚さを全く覚えないとすれば、美術界の将来は闇いよいよ濃くなるばかりである。しかし既に一部の良心的な人々は既製画壇の腐敗に失望して、己の土台を見つめ直しているときくと、一縷の光明を覚える。



北洋 島田 稔



親子 島田 稔

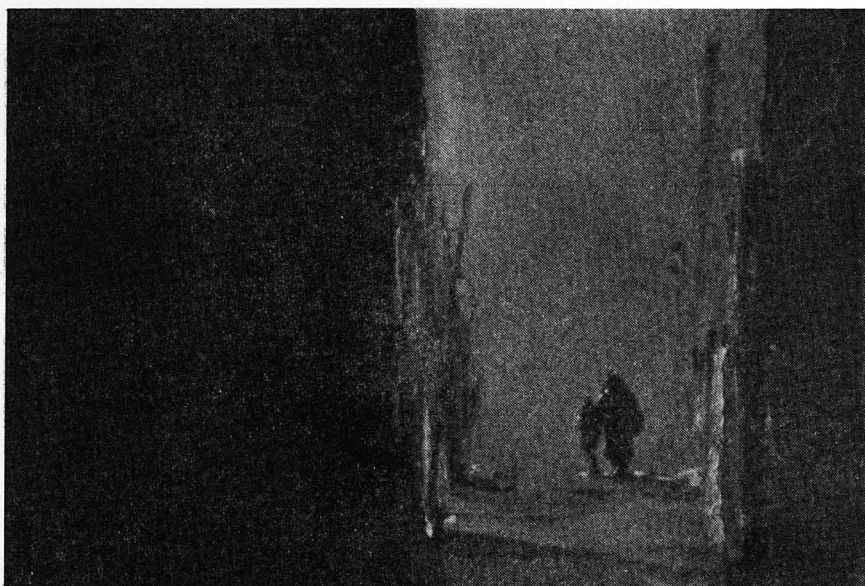




大根干し 島田 稔



潮風 島田 稔



路地 島田 稔



スケッチ 島田 稔



### 金子徳衛 (1914~)

今更ここに登場して貰うには、という思いが筆者にはある。というのも各種の賞をとり、つとに日展会員をつとめ、三越の国際形象展の招待作家でもあるというのは、金子の資質が客観的に評価されている証拠であるが、今その画歴のことを問題にしているのではない。そうではなくて金子の画面や心情について一再ならず心を動かされているからなのである。

心ある支持者を絶えず周辺につけてはいるが、利欲に恬淡たる金子と利欲に走りまわる作家とでは、自然に俗世の人氣に差が出てしまう。具眼の士の嘆きをよそに、作られた人氣に眼を惑わされる俗世の習わしは悲しい。そこで旗を振るわけなのである。

勿論具象作家であるが、アンバーがかった画面に描かれているテーマ——机とか椅子とか人形とかパリの裏街や果物——のマチエールは写真では残念ながら明瞭には表現されない。しかし金子の多くの絵を見なれた人ならば一見してその深みに心を吸い込まれるだろう。金子の絵を見てしまうと、その他のかなり多くの具象画家の作品がいかにも色あせてつまらぬものに見えてしまう。不思議な作用をする。

対象そのものに溶解してしまう金子の姿がどの画面にも映しだされている。色彩そのものが生命を持つ赫き、フォルムの持つ夢。説明になった画面（それがどんなに精密にデッサンされていようと）がいかにつまらないかということを例証してくれる金子の画面なのである。色彩の説明、フォルムの説明になった画面は一見して人々に絵画への了解をとりつけてくれるように思われる。分り易いとか平明であるとか、観衆をこばまないとかなじみ易いとか、まるで本物そっくりだとか。これらの表現に見られる絵画礼讃は、実のところ甚だ危険なのである。低俗からくる気易さ、甘えからくる安堵さ、同じ低さの次元からくる馴合を人々に与えてしまうからである。作品の写真を掲げておく。

ある抵抗（空間的または心情的）をもって人々へ真実への道を指し示す。絵画からの影響のうちでも一番大切な要素である。人々に自意識の換質換量を迫ることもせず、緊張からくる鼓動も与えない絵画は墮落と表現される。絵画から受ける感動は他の芸術作品がそうであるように、人々に自己変革の飛躍を与えてくれるはずである。

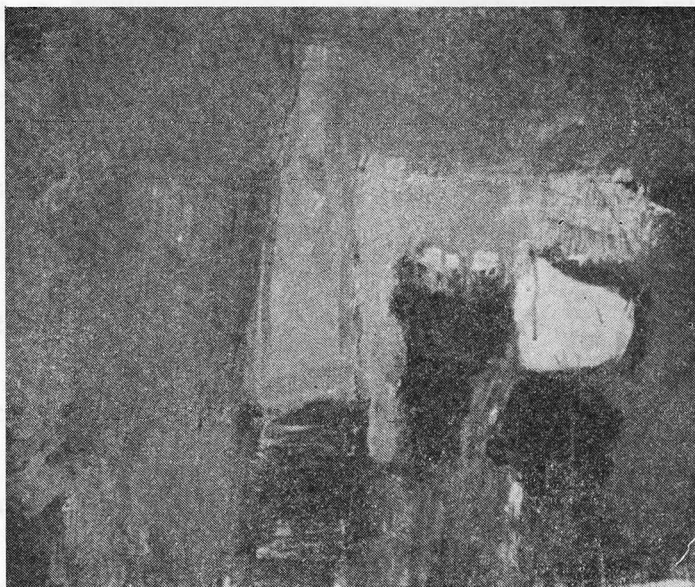
ある日「傑作」を觀賞して帰宅する。翌日どんな素晴らしい一日が展開されるか。名舞台、名画面を見たからといって、翌日の人生は昨日と比較して別に変化はしていないだろう。しかし繰り返しによるもっと永い時間を与えよ。社会観や芸術観の変化は、こうした機縁があったればこそである。



ビン 金子徳衛



栗 金子徳衛



静物 金子徳衛



コンポジション 金子徳衛

金子の画面は仲々人に了解されないであろう。しかし一旦了解されてしまうと、金子の絵画的世界はいかにも人なつこく、人々を受容してくれるだろう。金子の純粋性が光り出すのである。名誉欲の出世欲の権勢欲の一っかけらも持ちあわせていない姿勢が香気溢れる魅力を画面ににじませている。

彼にいわせれば「俺のような人間が一人ぐらい居てもいいだろう。」大体において変な人気にあおられてぐらつく絵描が多すぎる。10代のヘナチョコ歌手と同じ構図になってしまう絵描の見てくれの華美さ、節操のなさ、世情に阿ねる単純さ、迎合する賢さ、——画壇の墮落が叫ばれて久しいが一向にそれが改まらないのは画壇の支配的権力機構にも問題がある。

低俗な芸術愛好家、俗物的な芸術批評家を寄せつけぬ美しさが、この世にあることを、金子は結局語っている。

今後とも遙かな将来にわたって、人々は絵画的真実を探し続けるにちがいないが、いつかは金子の画面をそこにつき合わせることだろう。

寡黙で地味で飾り気がなく、無邪気で澄んでいる。本物の芸術家はいつの世でもそうである。日経紙の主幹が「長い凝視に耐える絵」だと批判している(59年5月5日付)のはけだし名言である。長い凝視に耐える絵とはもう一度ふり返ってみざるをえない絵でもあるだろう。思わずふり返ってみると向こうでも手を舞わせて挨拶を送ってくれる。心情貧しき絵描の絵は醜悪さにみちいて凝視どころの話ではない。

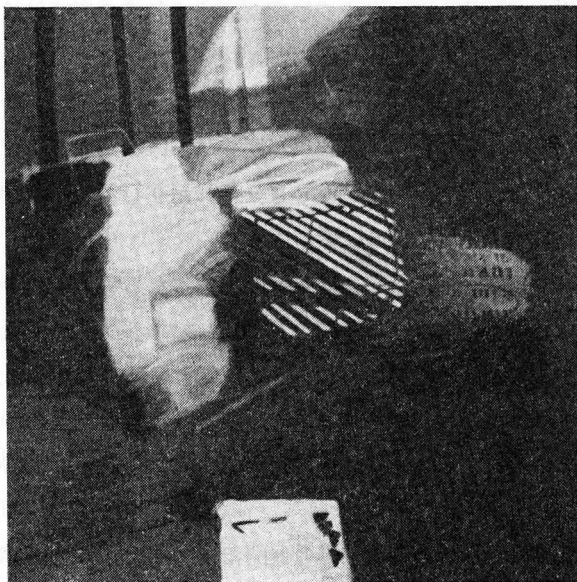
金子の絵を踏み絵にしてからのことにして貰いたい。絵の判断をするのには。絵の真実について語るには。

### 佐野ぬい

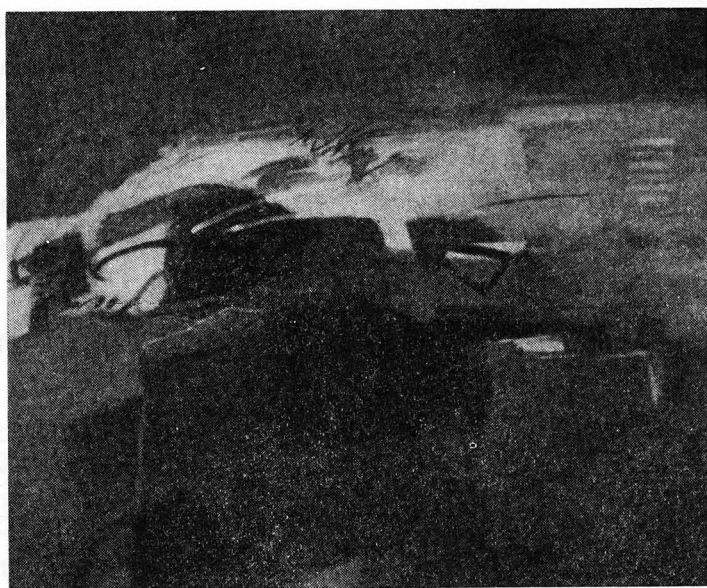
新制作派の会員、女流美術協会の会員、同時にアカデミズムにも関係している佐野は一部の人々からは既に抜き難い評価を得ているが、この稿には3番目に登場を願った。3人に共通している特色は、権勢に阿ねらず、ひたすら自分の世界をキャンバスに追求している気迫と真摯さとにある。

最近はずっと佐野ぬいモドキを見かけるようになった。公募展やグループ展の会場においてである。模倣されることは本人にとって名誉なことかどうかよくわからない。つい模倣したくなる程に魅力に富んでいるのか、模倣を許す程に採色や構図がなじみ易いのか。しかし処詮模倣をしたほうの負けである。どんな人間でも(男性の模倣者も見かけているので)、ついに佐野ぬいになれるわけがない。かく申す筆者もこのつぎの個展の時には「佐野ぬいの主題による変奏曲」を一二点出品しようかと、つい不遜なことを考えてしまう。





バハマ・普通の朝 佐野ぬい



ユニオンスクエアの線 佐野ぬい

作品を2点紹介しておく。(昭和59年度の新制作展出品のもの)

写真で示したように抽象絵画なのであるが、佐野の想念の中には地球という一つの星がいつも縋められているのだろうか。

その星の上に人間が誕生して以来、部族が民族が、いろいろの宗教をまといながら、合併したりさせられたり、分断したりさせられたりして、その間にいろいろの愚行が行われてきた。その最たるものは戦争である。

愚行に反対する意識はおよそ人類全体のものであるだろう。それが佐野の絵の中にも据え付けられていると見るのは筆者の思いすごしであろうか。反戦絵画の名作は具象画としてヨーロッパの各地に保存されている。たとえば宗教絵画は大づかみにいえば主調は反戦に他ならない。心の平安を求める境地は戦争にはないからである。戦争の残虐さや無意味さや愚さの描写は、平和な農村や愛しあう恋人同志の描写と何れが戦争反対を訴えるだろうか。

と思いつつ佐野の絵を見る。抽象世界の展開だけに、反戦に結び付けてしまいたくなる程、それ程に美しいのである。

澄明な佐野の世界、人間の一切を包み込み、人間を慰留する広がりを持つ美しさ——佐野の画面から何を想像しようともそれは各人自由だが、筆者は以上のように考えてしまう。人間の魂に静謐を与え、明日への旅立ちに勇気を与える絵画的世界。

女学生時代、上田敏の名訳によってフランス象徴詩の洗礼を受けて生長した佐野が、詩のかわりに絵で身を立てたのは意味が深い。筆者はサンボリズムを直ちに反戦に結び付けるのは牽強の譏りを免れないと思う。しかし詩はしめやかな人間の内なる声を歌った記録であり、平和を希求する時代背景がなくてはかなわぬ。平和が永続することによって詩は誕生するのか、それとも平和が脅かされる時にそうなるのか。退廃は平和が続くことによって生ずるのか、文明の混乱が平和に関係なく惹き起されることによって退廃へ道を開くのか。そうして見ると佐野の世界はいかにも精神的に病むことを拒否している星の支えになっているとも見える。

芸術活動はいつの時にもどこかで反戦に結び付くものだが、とり立てて自分の絵を反戦に結び付けられると佐野は困惑するかも知れぬ。

愚行はいつも正義であり、神の許し給うところであり、民族生存を賭けた戦争は謳歌されるべきであろうか。いつも下級下層の人々の生命が真先に奪われていく。

芸術(芸術活動)は戦争とは対蹠的な平和の社会条件の整う時のみ可能であり、開花し結実する。戦争を準備し戦争に明け暮れている時に、芸術(芸術活動)は本来の成果を示せるはずがない。佐野の画面から期待されるもの、飛翔されるものは抒情の美

しさを通りこしながら湧きあがる人間讃歌だろう。

反戦は時に激しくアピールされねばならないが、金切声をあげればあげる程、その声は余り遠くへは届かぬものである。

前述のように含羞と静謐と寡黙の作家三人をあげたのであるが今後の稿は絵画における抽象と具象の分野について社会学的な考察を進めたい。そこに一括して参考文献名を掲載する。

この稿の末尾に、筆者の近作の詩を付記しておく。21世紀に人間が、この地球上に生存し続けられるかどうかの怖れ。詩の末尾のほうの「あなた」とはまさに人間全体を指し示しているのである。

#### 歳歳年々人不同

生の単語を糺す副詞句に心を惹かれる  
たとえば「絵画」  
絵のような風景を音楽に似せて描く時にか  
たとえば「愛」  
普遍である中味を孤立して保つ時にか  
たとえば「Professional」  
職業としての学問を  
生涯としての宗教におきかえる時にか  
もうあなたの胸から  
豊かな浪漫の火が消えてしまったのは  
マスネーもドビッシイもスタンダールも  
ウェーバーもヴィンチ村のレオナルドも  
あなたの遙か背後にあって  
なお深い感動を贈ってくれるのに  
あなた抜きの21世紀がやってくる  
はかなさを思う時にか

掲載写真は Koda-color (ASA 400) 35 mm を使用し、その原板より白黒に引伸したもの。何れも筆者撮影。印刷不鮮明で残念であるが、カラー版の引伸し並みサイズ（サービスサイズ）希望の方があれば焼増しをして御送りしたい。美しさがよく表現されているので。なお文中敬称を称略させていただきました。

（こばやしかずお 本学教授・社会学）